

教育

5
1994

特集 シンポジウム「学力・学習」

No. 574

学習指導の転換を
何を転換するのか？
学力論と知育の伝統
学習を問い直す
学習論の構図

田中孝彦
増島高敬
稲葉宏雄
竹内常一
西本勝美

吉田和子・宮田雅己・岩辺泰史・仲本正夫・小島昌夫
三上和夫・藤原義隆・内海和雄・内島貞雄・藤岡貞彦

おおらかに生と性を語ろう！
性の感情と教育

近藤真庸
坂元忠芳

国土社

教育科学研究会編集

昭和二十六年十二月十日第三種郵便物認可
平成六年五月一日発行(毎月一回一日発行)

教育 574

シンポジウム「学力・学習」

一九九四年

五月号

79.5

「空間」と「共生」がキーワードに

教育科学研究会編

『現代社会と教育』第一巻「現代と人間」

本書は、「現代社会と教育」と題する六巻シリーズの第一巻である。三部に分かれ、計一〇本の論文が並んでいる。

第一部 地球化社会と人間

1 地球と人類 大田 堯

2 アジアと日本——共生のための社会・文化・教育を考える 佐貫 浩

3 社会主義のゆくえ——過去と未来との対話 小森田秋夫

第二部 日本企業社会と教育

1 伝統と革新 山住正巳

2 現代の産業社会と競争 乾 彰夫

3 「労働と教育」の射程 三上和夫

第三部 子どもの成長と教育の制度 小玉重夫

1 家族の現在 平塚真樹

2 地域社会と教育の現在 小玉重夫

3 都市空間と子ども——おとなと子ども

ものための生活空間の設計 室崎生子

4 「教育実践」としての教育制度 淀川雅也

空間の再設計

本誌編集部からの依頼は、「辛口な書評を」ということだった。それぞれの論文の要旨は、「はじめに」で三上和夫が要領よくまとめているから、屋上屋をかけることはやめて、政治学を専攻する門外漢からの、全体的印象批評に徹する。

右の構成は、おそらく「グローバルからローカルへ」あるいは「地球から学校へ」という「空間」イメージでたてられたものだろう。事実、第三部の室崎・淀川論文に限定しなくとも、地球・アジアと日本、都市と農村、東京と沖縄、企業社会・地域社会・家族と学校などの共時的連関が全体を貫き、かつ、個々の論文

でも意識されている。山住論文には「魅力的な空間をつくり広げる」という見出しも出てくる。本書から受けた評者の第一印象は、「空間」の教育学ということである。

もう一つのキーワードは、これも強引に読み込めば、「共生」であろう。表題では佐貫論文のみがかかっているが、地球生態系と人類の共生、アジアと日本の共生、地域と学校の共生、おとなと子どもの共生という具合に、「二項対立のどちらの極にも解消しないかたちで、論じようとしている。その端的な現われが、三上論文の「労働と教育」という主題設定である。三上はそこで、「労働の教育」でも「教育の労働」でもない「労働と教育」という問題設定で、「教育制度が社会の必要において発生しながらなお社会に還元されない一定の固有のまとまりをもつこと」を示そうとしている。いわば、一次方程式では解けないものとして、社会の多次元解析のなかに「教育」を投げ込み、現実を切り取り、同時に「接合」

「つなぎ」「棲み分け」の論理で、「共生」に向かおうとしているように見える。あらゆる還元主義に反対する「ネオ・マルクス主義」ないし「ポスト・マルクス主義」の方法を提唱してきた評者からすれば、無論、こうした思考の試行は、大歓迎である。

評者が強引に抽出した二つのキーワードをくっつけると、「空間的共生」が本書の主張と受け取れる。しかし、著者たちにならって、ここでもやはり「と」の論理でテキストと対話してみよう。実は「共生」は、いまや経団連や官庁文書も好んで使うスローガンだが、「言うは易く行なうは難し」である。論理的につなぐさいにも、「接合」「レギュラシオン」「ハビトゥス」「オートポイエシス」の応用など、かなりの工夫を要する。

たとえば巻頭の大田論文は、中国での「経済成長のための農村教育の推進」を目的の当たりにした経験から、「農村工業を環境保護と調和して発展させていくのはどうするか」を問いかけ、中国の二酸化炭素排出量がこの一〇年で六五%増、世界全体の一%に達したことを危惧し

ながら、「だからといって、中国農民一人あたりの年間収入五千円内外で、工業化その他による経済成長が望ましくないと言えるわけがない」ジレンマを告白している。むしろ「豊かな国」の人々の「内面汚染」「マネーと効率と浪費」に「新しいライフスタイルと新しい人と自然、人と人、大人と子どもとのかかわり合いのシステム」を対置する。佐貫論文も、大学生協連の調査で三人に一人の学生が自由に使えるクルマをもち自動車維持費が本代より多いと報告しながらも、「クルマ廃絶」とはいわない。それは、小森田論文が、「社会主義」を「市場対計画」という二項対立からずらして「公共的な性格をもつ事項の公共的な制御」へ、「分業の克服」を「専門性の否定」ではなく「役割区分の適切な設定」と「生産の場」だけでなく政治や家族の役割分業のレベルで論じ、乾論文が、競争一般の否定ではなく、日本的「過剰競争」「二元的構造」を英独型「多元的競争構造」へと組み替えようとしていることと、相補的である。評者は、こういう

迎して、最近の論文では、過程としての「ホメ殺し社会主義」を提唱している（加藤他「社会主義像の展相」世界書院）。だが、空間軸での「共生」は、時間軸におきかえればどうなるかを、改めて考える必要があるのではないかと。要するに、歴史性・通時的連関を本書に加味するとどうなるかが評者には気がかりな点であった。時間軸の問題は、この講座では、第二巻の「子どもとおとな」や第六巻「二一世紀の人間と教育」の課題なのかもしれない。実際、第六巻をのぞくと「希望としての教育」「あそび・余暇・まなび」「人間的自我の将来」「世代間の対話と共生」など、評者の理解する意味での「時間」の教育学も展開されている。だが、この第一巻でも、「共生の空間」を構想するうえで「時間」と歴史の問題は、クリティカルな論点として通底しているように思える。つまり、自然と人間、地球・アジアと日本、教育と労働、地域と学校などの「共生」を空間的にイメージするにあたって、そのどちらをどのような時間的パースペクティブで位置づけるかで、接合の論理も共生のあ

り様も、変わってくる。空間的「棲み分け」では済まない圏域も出てくる。

この点で興味深いのは、自然と人間の共生を扱った大田論文、家族と学校を論じた小玉論文である。大田論文は、地球環境問題と「世代的不平等」を扱うなかで、中国民衆にそれをおしつけることはためらいながらも、「自然の征服者、地球を支配する主人公と言った私たちの理性的存在としてのおこり」を明確に拒否し、ルソーとはやや異なるニュアンスで「自然に帰れ」と提唱する。小玉論文は、学校と家族は「子ども」カテゴリーと同時に一対で近代に誕生することを確認しつつ、学校Ⅱ公、家族Ⅱ私という公私区分の歴史性をあげ、「社会的なるもの」を媒介に、家族の問題を公共的に意味づけていくコースを提示する（小玉は必ずしも明示的に語ってはいないが、これは学校の教育機能の一部の「再私化」「脱制度化」を伴うだろう）。つまり、かつての「全面的に発達した諸個人」や「総合技術教育」とは、ある意味では対極にある発想での問題のとらえ返しを、示唆している。

「空間」の共生原理を問うのなら、たとえばエスニシティやゴミ廃棄物問題と関連して社会学者が開拓した「受益圏 vs 受苦圏」、評者や平田清明の提唱する「空間主権」などの発想も、参考になるだろう。そうすれば、平塚論文の扱う「地域と教育の関係のゆらぎ」、室崎論文の「共用空間」、淀川論文の「生活圏Ⅱ学区」なども、異なる様相で見えてくるだろう。大田の「内面汚染」の発想を徹底し、人間の心身にも「自然に帰れ」をおよぼすなら、評者が最近提唱している「エコロジー（生態学）」の身体化Ⅱ「エルゴロジー（勤態学）」に行き着く（平田・加藤他「現代市民社会と企業国家」お茶の水書房、加藤「過労死と過労死のエルゴロジー」『叢書へ産む・育てる・教える』第四巻、藤原書店）。

この点で、時間軸をも含めて考えると、「戦後民主教育」を担ってきた大田が「自然に帰れ」を提唱し、山住が「自然Ⅱ無意識の空間・時間」「生きるには旗要らず」の境地に達しているのに、そのなかで育った中堅・若手研究者Ⅱ本書の中心的書き手の立脚点が、必ずしも明晰

でないのが気になった。たとえば大田も佐賀も「サステイナブル・ディヴェロップメント」を紹介しているが、周知のようにこのスローガンは、九二年ブラジル環境サミットでは、鋭い内的緊張をはらんだ。北と南の政府間のみならず、各国政府代表団とNGO・NPOとで、理解の違いがあった。評者は、そこでは安易に「共生」させるのではなく、大田の「自然に帰れ」、世界NGOの合意した「民衆の地球宣言」の方にくみする。要するに、猿が人間になるにあたっての労働の役割の絶対性や、溢れるばかりの物質的富のもとでの彼岸的自由の謳歌とともに、「全面的に発達した諸個人」や「総合的技術教育」の理念も終焉したことを、どこまで深く内省するかが、問われている。平塚論文が触れる「生産労働の相対化」「相互承認の関係」を、つきつめて考えるべきであろう。近代的自然観・自我観にたいする、各論者の世代的スタンスの相違が、やや気になる一冊であった。

（二七八頁・二八〇〇円、大月書店）

（加藤哲郎Ⅱかとうてつろう、一橋大学・政治学）